しかし子どもたちは、その子がどこに住んでいるのか知らないし、これまで一度も会ったことがないんだ、と言いました。それで大男はとても悲しい気持ちになりました。毎日、午後になって学校が終わると、子どもたちはやってきて大男と遊びました。でも、大男が一番好きだった小さな男の子は二度とあらわれませ

んでした。大男は子どもたちみんなにとても親切でした。しかし、大男は自分の初めての小さな友にとても会いたいと思いあの子のことをたびたび口にしていました。「あの子に会いたいものだ」と大男はよく言っておりました。何年もたち、大男はたいへん年老い、体も弱くなりました。もう遊ぶことはできませんで

したから、大きなひじかけいすにすわり、子どもたちが遊んでいるのを見ながら、庭のながめを楽しんでおりました。「ここには美しい花がたくさんさいている」大男は言いました。「しかし、子どもたちが何よりも美しい花だ」ある冬の朝、大男は服を着ながらまどの外を見ました。いまでは大男は冬をにくんではい

ませんでした。春はねむっており、花は休んでいるだけだ、とわかったからです。とつぜん、大男はおどろいて目をこすり何度も何度も見なおしました。